銀化 2

晩秋の甲府駅前で、浅川泰明（やすあき）は宣伝カーの屋根に立ち、右手に握ったマイクに向かって大声で叫んでいた。彼は茶色のウールのコートの襟を立て、革手袋をはめていたが、半時間前から吹き始めた北風の冷たさは身に染みた。

山梨県知事選挙に立候補した早瀬豊（ゆたか）が、夕方の五時にそこへ来て演説をすることを伝えるのが、その日の浅川の役目だった。カラオケ以外では人前でマイクなど握ったことのない浅川にとって、この役目は冒険だった。しかし彼は、勝ち目のない選挙であると知りながら、自分を賭けようとする早瀬を放っておけなかったし、また何よりも、早瀬の信じるものに共感していた。だから、五十歳を過ぎたこの歳になって、初めて選挙運動に加わる決意をしたのだった。

「駅前を行く甲府市民の皆さん、山梨県民の皆さん、私たちの故郷の自然を護るために知事選に立ち上がった早瀬豊は、本日午後五時から、この甲府駅前で皆さまにご挨拶いたします」

コートのポケットに手を入れて駅前を足早に行く人々の流れは、浅川の声に無反応だ。しかし彼は、家で暗記し

た標準語のセリフを懸命に繰り返しているのだった。

「早瀬豊は、今日（こんにち）の山梨県の自然が、経済発展を目的とした生態系の破壊や開発行為によって危機に瀕していることを憂え、長年オーストラリアで自然保護に携わった経験を生かし、故郷の自然再生のために知事選に立候補しました。私たち人間は自然の一部です。自然破壊によって、人間は幸福にはなりません。生態系の破壊によっては、本当の意味での経済発展はありえません。早瀬豊は、そのことを皆さんに訴えます。午後五時からの早瀬豊の街頭演説をぜひお聞きください」

浅川泰明は、山梨県水産試験場の所長という立場で今回の選挙運動に加わることに一度、躊躇した。しかし、三十年の仕事の中で培われてきた彼の自然への愛情と、目の前でそれが失われていくことの無念さ、そして妻の応援が彼を動かした。彼の持論は、「人間に好ましい生物ばかりを殖やし、好ましくない生物の撲滅をはかることは、生物多様性を減退させることになるから結局、自然の一部である人間にとって好ましくない結果となる」ということだった。

だから、一九九〇年代に山梨県の湖や河川に北米原産で肉食のブラックバスやブルーギルが持ち込まれた際は、上

部機関である県の水産振興課に宛てて異種導入の禁止措置を求める意見書を提出した。が、その提言は採用されず、これら北米産の魚たちは次第に増殖し、そのおかげでワカサギやアユ、コイ、タナゴなどが激減した。また、二〇〇六年になって釜無川（かまなしがわ）に遺伝子組み換え種のニジマスが出現した時にも、浅川はこれをできるだけ早く駆除することを進言したが、やはり県上層部には聞き入れられず、組み換え種の魚は放置されてきた。

それどころか、あれから一年たった現在、県はそれまで名目的に掲げてきた「外来種規制」の原則を放棄し、外来種同様のリスクがある遺伝子組み換え種のこのニジマスを、県の〝特産〟として育てて、県経済の振興を図ろうとしているのだった。その大きな理由は、この魚が釣り人たちの人気を博しており、全国から集まる人々が支払う入漁料が急増しているからだった。

問題のニジマスは、普通日本では見られない海洋降下型のニジマスだった。サケ・マス類の魚は、川から海に出る前に、海水に適応する準備の一環として、体色を銀白色に変えるものがある。これを「銀化（ぎんけ）」といい、銀化するニジマスを北米では「スティールヘッド」と呼んでいる。ステ

ィールヘッドは、日本ではかつて北海道の一部の川で発見されただけで、もう長い間見られなくなっていた。ところが釜無川で見つかった種は銀化していただけでなく、体長が一メートルにもなる大型だった。そういう魚が関東地方で殖えるならば、それは大きなビジネス・チャンスだと多くの人が考えたのである。

もちろん、遺伝子組み換え生物法の規定では、組み換え種の動物は五年間の評価期間前に自然界に放つことは禁じられていた。しかし、山梨県のスティールヘッドは、何者かが数年前に放流したものが自然に殖えてしまったものであり、生態系へのマイナスの影響は今のところないようだった。そこで県では、この法律の例外規定を利用して、他県にスティールヘッドが現れる前に、この新種の日本でのライセンスをもつ大手水産会社と独占契約を結び、大規模な養魚場を建設することを計画しているのだった。

これが、この選挙で「市民派」と呼ばれる人々の〝ふるさと振興策〟の中心をなしていた。市民派は、政治的には現職知事の阿藤兵庫（ひょうご）をかついだ与党連合（四会派）で、経済界の応援も得ているから、阿藤の当選は確実と考えられていた。

これに対して異議を唱えたのが早瀬豊を擁立する「自然派」と呼ばれる人たちだった。これは環境保護派を中心にした無党派層の市民グループで、それを共産党などの野党が応援していた。早瀬はここ数年、甲府市にある県立水産大学で生物学の教授をしながら生物多様性の保護を訴え、インターネットのホームページでも同じ趣旨の論説やエッセーを次々に発表していたから、全国にそれなりの数のファンをもっていた。が、彼は長年、オーストラリアで外来種生物導入の研究をしていて、数年前に県民となったばかりだから、県の政界や経済界とのつながりが薄かった。だから一般の県民から多くの支持は得られまい、というのがマスコミを含めた大方の予想だった。

しかし、学問的知識と素養に限って言えば、早瀬はこの〝ニジマス問題〟を扱う適任者だった。彼は、帰国する前の数年間、コイの研究に没頭していた。このコイは、ヨーロッパからオーストラリアに持ち込まれた外来種だった。それが南東部の川で増殖し、在来種の魚を駆逐しかかっていた。当時、オーストラリア政府が考えていたことは、コイの遺伝子の一部を組み換えてオスばかり生む種をつくり、それを川に放つことだった。卵を産むメスが生まれな

ければ、絶滅は時間の問題だからである。この〝オス化〟の技術導入に猛然と反対したのが早瀬教授だった。理由の一つは、遺伝子組み換え種の放出は、新しい外来種の導入と同じ危険性があるということ。もう一つは、組み換えられた遺伝子は不安定であり、時間の経過とともに予測できない変化が生じるということだった。しかし、その意見は聞き入れられず、オーストラリアでは二年前、南東部の河川に遺伝子組み換え種のコイが放たれた。早瀬教授は、それに抗議する意味もあって日本に帰国したのだった。

浅川泰明は仕事がら、早い時期から早瀬のこういう活動に注目し、電子メールなどで意見交換をしていた。早瀬が水産大学の教授となってからは、同じ県の地方公務員という立場も手伝って、お互いに急速に親交を深めていったのである。

甲府駅前では午後五時前になると、浅川の乗った宣伝カーの周りにはさすがに人垣ができていた。その中には自然派陣営の〝サクラ〟ももちろん混ざっていたが、前宣伝がゆきわたっていたせいか、テレビカメラを抱えたマスコミ関係者の姿も見えた。実は早瀬は、知事選の中盤に行われるこの演説会で、大きな〝賭け〟を計画していた。その計

画の内容は、浅川以外の誰にも――自然派陣営の選挙参謀にも――知らせていなかった。ただ、「ある重大発表をする」と言ってあったから、それに興味をもった報道関係者が来ているのである。

早瀬豊は、演説開始の数分前に駅前の雑踏の中に姿を現わし、箱型の宣伝カーの中に飛び込んで大急ぎで用意をしてから、浅川の立っている屋根の上に昇ってきた。

「遅れて申し訳ない。準備がぎりぎりになっちゃって……」と、彼は息をはずませて浅川に言うと、マイクを受け取って聴衆の方へ向き直った。

「甲府駅前にお集まりの県民の皆さん、本日は夕方のお忙しい時間帯に私、早瀬豊の立会演説会においでいただき、本当に有難うございます」

早瀬は、茶色のコールテンのズボンの上に黒い革のジャケットを着、肩の上から自分の名前入りの白いタスキをかけた姿で、体を前後にゆっくり動かしながら話しはじめた。

「選挙も中盤戦に入り、私、早瀬の自然派陣営は苦戦を強いられていると言う人もいますが、私は決して苦戦とは感じていません。県民の皆さんは本当のこと、真実が何であるかを理解されれば、必ず私、早瀬の立候補の目的に賛同

され、無秩序の開発と自然破壊、そして、ふるさと山梨の生態系の混乱をもたらした従来の政治に『ノー』と言い、本来の美しい〝甲斐の国〟の自然秩序の回復を目指す早瀬に『イエス』の票を投じて下さると、私は強く信じています」

浅川は、早瀬の使った「本当のこと」という言葉に注意した。それは、これまでの演説では使われなかった言葉だった。

「『本当のこと』は、私たちの目から隠されていることが多いのです。私はそれを学問研究の中でいつも実感してきました。しかし、民主主義の社会では、まずそれを有権者の皆さんが知らなければなりません。知る権利があります。そうでなければ正しい判断ができずに、県政は誤った方向に動いていきます。早瀬豊は、今日はそのことを強く訴えたい」

いよいよ重大発表がある、と浅川は思った。

「県民の皆さん、早瀬はこれから、今回の知事選の大きな争点となっている〝ニジマス問題〟について、新しい事態が起こっていることをご報告したい。これは私がごく最近になって、学者として直接目撃した事実であり、まだ誰に

も申し上げていないことです。阿藤兵庫知事とその応援団である与党連合は今、人気の高いスティールヘッドが県内の河川や湖で殖えることが経済発展をもたらすと主張していますが、その予測がまったくの誤りであることが判明しました」

早瀬はここまで言うと、一度息をついで周りの聴衆を見渡した。その目には自信が溢れていた。

「私はこの間、知人が釜無川で捕ったニジマスだといって持ってきた魚を四尾解剖しました。その腹からは、ブルーギルの成魚と幼魚が出てきました。また、その四尾の腹の内容物を詳しく分析してみた結果、消化しかかったオオクチバスの骨や鰭も見つけました。オオクチバスとは、皆さんがブラックバスと呼んでいる魚です。一体このことは何を意味しているか、お分かりでしょうか？」

こう言うと、早瀬はまた聴衆を見回した。宣伝カーを取り巻く人垣は皆、早瀬の方を向いている。

「皆さんがすでにご存じのように、遺伝子組み換えのニジマスは成長ホルモンを異常に分泌するため、普通のニジマスの五倍から六倍の速さで成長します。しかし、何も食わずに成長するわけではありません。餌をそれだけ多く食べ

るのです。では、釜無川では何を餌にするのでしょう？これまた皆さんもご存知のように、この川にはもう、天然種のアユやイワナやヤマメはいなくなりました。その代わり、各地にゲリラ的に放流されたブルーギルが下流にはすんでいます。また、富士五湖にはバスやギルが沢山いるのは誰でも知っています。スティールヘッドと呼ばれるニジマスは、そのバスやギルを食べて成長しているのです。これはきっと遺伝子組み換えの影響です」

聴衆からは、何の反応もない。それでも彼は続けた。

「今、山梨県の湖や沼では、ブラックバスが魚の世界の頂点にいます。もし阿藤知事が当選すれば、今度は、そのブラックバスを食べる魚が、養殖によって大量に放流されることになります。バスやギルの数は激減し、ふるさとの川や湖は、ほとんど一種類の魚しかいなくなる可能性があるのです」

早瀬のこの演説は、夜のニュースで取り上げられ、翌日の新聞には彼のインタビュー記事も掲載された。阿藤陣営は、早瀬のこの予測を「単なる憶測」として否定し、スティールヘッドの放流はバスやギルの増加を防ぐから、在来種の繁殖を逆に助けるのだと主張した。

◇

山梨県知事選挙では早瀬の〝重大発表〟以降、振り子が揺れ戻したように自然派が勢力を伸ばした。早瀬の言葉を借りれば、「都会の人間を当てにした自然の切り売り」が間違っていることに、多くの県民は気がついた。しかし、市民派の力には及ばず、阿藤兵庫は僅少差で勝利した。その結果、スティールヘッドの養殖と放流については県議会が二つに割れ、結論が出ない状態が長く続いた。が、その頃には、県外の河川でもこのオオニジマスが目撃されるようになり、独占契約は無意味となった。そして、全国でバスやギルが減少し始めたことが分かると、「日本原産の魚をいかに護るか」が国会でも真面目に議論されるようになった。

ところで、早瀬豊はその後、浅川泰明とともに日本水産研究所を設立し、ニジマスに続いてベニザケやサクラマスの中にも成長が異常に速い種が現れたことの原因を探っている。

署名は検証されていません。
Masanobu Taniguchi
電子署名者：
Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, o=Seicho-No-Ie International Headquarters, ou=Vice President, c=JP
日付：2002.11.27 16:01:56 +09'00'
理由：この文書の著者
場所：Tokyo, JAPAN